

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 大木 龍之介

論文題目

「正常」な身体のゲシュタルト崩壊
——西洋視覚文化におけるボディ・イメージとその歪み——

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	松下千雅子
委 員	名古屋大学教授	星野 幸代
委 員	名古屋大学准教授	古橋 忠晃
委 員	中京大学准教授	森 有礼

1. 本論文の構成と概要

本論文は、身体の捉え方に関わる病理の言説を読み解くことにより、身体を「正常」に捉えることの不可能性を明らかにした意欲的な論文である。本研究では、「正常」で「客観的」な眼差しは本当に文字通り「正常」なのか、われわれが自分の身体を「客観的」に見ることは可能なのか、を学術的な問いとしている。西洋視覚文化において、ボディ・イメージの歪み (Body Image Disturbance) に関連すると考えられる摂食障害や醜形恐怖症といった医学上の病を描く様々なテキストを分析することにより、申請者は、「正常」な身体や「客観的」な視点が根本的な不可能性を巡って構造化されていることを明らかにし、この構造を「正常」な身体のゲシュタルト崩壊」と名づけた。ゲシュタルト崩壊とは、持続的注視によって漢字の正しい形が分からなくなる現象を指すが、申請者は、この現象が身体への持続的注視によって、ボディ・イメージにももたらされると考え、「正常」な身体を追い求め続けると「正常」とされるものから遠ざかるとして、「正常」な身体のゲシュタルト崩壊の定式化を行った。このようにして提出した新たな概念を用いて、申請者は、西洋視覚文化における「正常」な身体がどのように語られ、描かれ、見せられてきたのかを丁寧に読み解き、「正常」なものがいかに欲望に歪められたものであるかを、精神分析とジェンダー論の知見を用いて論証した。

本論文では、まず序論「正常」な身体のゲシュタルト崩壊」で「正常」な身体のゲシュタルト崩壊」に関する理論的枠組みが、ジャック・ラカンによる精神分析理論を用いて提示される。美の規範によって提示された理想的で規範的な身体のイメージは、根本的な不可能性を巡って構造化された「他者」の欲望に支えられ、貫かれ、歪められた対象 *a* として位置づけられる。しかし美の基準を定める「他者」が欠如しているがゆえに、審美的に「正常」とされる身体は、到達不可能なものでしかありえない。そのため主体は、つねに「他者」の眼差しに好ましく映る身体を手に入れるという欲望を、断念せざるをえない。この欲望を妥協せず、「他者」の眼差しの具現化である「正常」な身体に近づこうとする人々は、やがて身体的にも精神的にも不健康な状態に陥ることとなり、「正常」とは程遠い、逸脱した人物として、「父の名」によって病理化される。「父の名」の役割は、主体が「他者」の欠如という「現実」に近づき、欲望の先には死の欲動しかないという事実を暴き出すことを、すなわち享樂することを禁ずることにある。ボディ・イメージの歪みを抱えるとされる摂食障害や醜形恐怖症の人々は、「他者」の眼差しの具現化である「正常」な身体を執拗に追い求めた結果、「他者」が根本的な不可能性を巡って構造化されていること、そして「正常」な身体の前には身体と精神に悪影響を及ぼす死の欲動しかないこと、すなわち「正常」とは字義通りの「正常」とは程遠いものであることを、偶発的に露呈させており、ゆえに病理化される。

第一章から第五章までは、この理論的枠組を踏まえて、ヤングアダルト小説、テレビ番組、ビデオ、映画において、いかにボディ・イメージの歪みが病理化されているのかを論じている。第一章「ボディ・イメージの歪みの精神分析——『鏡の中の少女』における拒食症のドラマと象徴的なものの矛盾——」では、心理療法士のスティーヴン・レヴェンクロン (Steven Levenkron) によるヤングアダルト小説『鏡の中の少女 (The Best Little Girl in the World)』(1978) を取り上げている。主人

公フランチェスカは、女性美と結びつけられた痩せという「正常」な身体を、「なることを通して手に入れる」欲望の対象として追い求める。フランチェスカの執拗な痩せの追及は、彼女の身体を羸瘦状態へ近づけてしまう。これは、欲望は絶え間ない成就の遅延によってその本質が死の欲動であることが暴かれるという、欲望する主体の当然の帰結である。一方で物語に登場する心療内科医のシャーマンは、フランチェスカを病理化し、「知っている」と想定された主体」としての役割を担うことで、彼女にその欲望を断念させる〈父の名〉として機能していることが指摘される。

第二章「プラスチックな鏡像段階——『ボッチド』における美容整形の表象と「寸断された身体」——」では、美容整形が、個々人の「正常」な身体への不可能な同一化を、まるで可能なものであるかのように見せかけるものとして機能していることを、美容整形を題材としたアメリカのリアリティ番組である『ボッチド (*Botched*)』(2014-2020) の分析を通じて明らかにしている。主体は美の基準という象徴的秩序である〈他者〉の眼差しによって、「〈わたし〉は醜い」という幻想を与えられるが、美容整形の過程において、「醜い」とされる身体の部位は、視覚技術によるイメージ上でばらばらに寸断される。審美的に「正常」でなく、ゆえに寸断された身体を「矯正」するために美容整形を受ける主体は、手術を経て、手術前とは異なるボディ・イメージへの(再)同一化を果たすこととなる。申請者はこの同一化の過程を「プラスチックな鏡像段階」と名づけ、美容整形(プラスチックサージェリー)が主体に「正常」な身体への(再)同一化を経験させるものとして機能していることを明らかにしている。

第三章「美容整形と「正常」な身体の様相——『エクストリーム・メイクオーバー』、『ザ・スワン』、『ボッチド』——」では、まず美容整形の歴史を概観し、医学の一分野としての美容整形が、「正常」な身体を手に入れる手段として成長してきたことを明らかにしている。そして、アメリカで放映されたリアリティ番組である『エクストリーム・メイクオーバー (*Extreme Makeover*)』(2002-2007) と『ザ・スワン (*The Swan*)』(2004) を取り上げ、そこで美容整形がどのように描かれてきたのか、そしてどのような批判が浴びせられてきたのかを論じている。

第四章「なぜマッチョな摂食障害は見えないのか——ボディ・イメージへの執着と男らしさ——」では、ボディビルダーの巨大に鍛え上げられた身体を「男らしさ」の最たるものとして理想化する契機となった、アーノルド・シュワルツェネッガー (Arnold Schwarzenegger) 主演のドキュメンタリードラマ『パンピング・アイアン (*Pumping Iron*)』(1977)、その精神的続編として位置づけられる『ジェネレーション・アイアン (*Generation Iron*)』(2013)、男性の拒食症を描いた数少ないテキストであるルイ・メッツガー (Lois Metzger) によるヤングアダルト小説『ア・トリック・オブ・ザ・ライト (*A Trick of the Light*)』(2013) を取り上げる。ボディビルダーらの拒食症的な摂食行動とステロイドの使用に潜む危険性が「男らしさ」と結びつけられて後景化されてきたこと、男性の摂食障害が、「男性は細さを追求しない」、「摂食障害は女性の病である」というステレオタイプによって見過ごされてきたことを、明らかにしている。

第五章「スキニーな身体を読み直す——西洋視覚文化における痩せに対する受容の変化——」では、従来、女性美と結びつけられていた痩せた身体が、拒食症的で「スキニーな身体」として病理

化されてきたプロセスを考察している。かつて理想化されていた痩せた身体は、1980年代以降、批判にさらされ、拒食症のイメージと重ね合わされて「おぞましきもの」として描き出されるようになる。そして、2000年代には、あらゆる規範性を疑問に付す第三波フェミニズムのメッセージと共鳴する形で、痩せた女性を、外見にしか気を配らない、白人で、中流階級で、異性愛者で、シスジェンダーの「スキニービッチ」^{痩せているバカな女}として攻撃する価値観が出現した。本章では、「正常」な身体が、社会文化の変遷とともに刷新され、更新され、歪められてきたことを、広告、オンライン記事、リアリティ番組、音楽、ミュージック・ビデオ、テレビ番組など多岐にわたるテキストの読解を通じて、明らかにしている。

結論「「正常」になれない<わたし>たち」では、これまでの議論を踏まえ、「正常」な身体への同一化は、失敗する運命にあると結論づけられる。そして、「正常」な身体は、まさにこの不可能性において、主体の欲望を強く喚起するとされる。「正常」な身体を追求し続ける人々は、結果としてボディ・イメージの歪みを伴う摂食障害や醜形恐怖症に苦しみ、病的で逸脱した人物として棄却されてしまう。本論文は、「正常」な身体そのものが、身体や精神に悪影響を与えることなしに到達できないほどに「歪められた」ものであるということを指摘し、「正常」の追求が「逸脱」を導くという矛盾した境遇を、<「正常」な身体のゲシュタルト崩壊>であるとしている。

2. 本論文の評価

本論文は、正常な身体の捉え方と異常な身体の捉え方を脱構築して、両者の間の線引きの不可能性を明らかにしている点、難解な精神分析理論を正しく読み解き、ボディ・イメージの歪みという現象の分析に効果的に援用している点、ラカンの精神分析を単純にあてはめてテキスト解釈を行なうのではなく、<プラスチックな鏡像段階>や<「正常」な身体のゲシュタルト崩壊>など、新しい独自の概念を提出することにより、病気の本質に迫ろうとしている点、多彩なテキストに対する丁寧な読解を通じてこれらの概念の有効性を証明している点が高く評価された。支配的な美の基準に対する批判は、これまでフェミニズムとフーコー的な言説分析に偏りがちであったが、本論文は、精神分析を用い、さらに男性の拒食症を考察対象に加えることでジェンダーによる非対称性を明らかにしている点に新規性がある。

臨床の場において、本論文の知見を、強制的な治療を要する重症の摂食障害に応用することは難しい。しかし、このことは、本論文の価値を損なうものではない。なぜなら、本論文の射程は、病因論ではなく、軽症の神経症的な摂食障害のメディアにおける表象についてのひとつの精神分析的解釈であり、本論文で行われた構造的解釈は十分に説得力があると言えるからである。本論文は、摂食障害や筋肉醜形恐怖症という医学上の病気に関して、患者らのボディ・イメージの歪みを表象するテキストに焦点をあて、それぞれの病気の正常／異常モデルを批判的に分析することで、自身の身体を客観的に見ることの不可能性を指摘し、病気の本質にまで迫ることを試みた力作であるといえる。審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。